**№38　テーマ『悪化した人間関係を修復する実力』**

**講話日2014年11月7日**

**皆さんこんにちは。今日は今おっしゃっていただいたように悪化した人間関係を修復する実力ということでお話をさせていただきたいと思いますが、本当にいろんな意味で人倫の崩壊という風に言われる人間関係は至るところでズタズタに引き裂かれてしまうような状況が全世界的に広がっていて、人間関係で悩んで苦しんでいる人は非常に多いというのが現状ではないかと思います。皆様方におかれましても会社だけではなくて、家庭の中でいろいろと人間関係に困っている方もいらっしゃるでしょうし、また個人的な理由で恋愛なり、いろんな友人間でトラブルがあったり、困っているという方随分とも多いわけであります。そういう意味でやっぱり人生というものを本当に力強く生きていこうと思ったら、悪くなってしまった人間関係をそのままで放置するのではなく、自分自身でそれを普通の人間関係にまで修復していく実力をものにしないと、人間関係で成り立っている社会というものを生き抜いていく力が持てないんじゃないかと。人間関係のトラブルで悩んでしまうと、仕事もなかなか上手くいかなくなってきますし、不幸な人生になってしまうということもあるわけで、人間関係というものが素晴らしいものになっていくことによって、人生は幸せを感じることができるようになっていくんじゃないかと思います。学校なんかでもいじめということがあるけど、職場においてもメールとかいろんなもので誰かの悪口を流したりで、非常に困っている人も随分といらっしゃると聞いております。**

**では、どうすればそういう人間関係の問題を処理して乗り越えて、たくましく生き抜いていくことができるか。どのようにしたら素晴らしい人間関係をたくさんつくるという人生にしていくことができるか。それを考えることは、全ての人間に課せられた大きな問題ではないかと思います。普通の人間関係においても、ただ普通の人間関係だけじゃなくて、やっぱりそれをより素晴らしい人間関係にしていくことも考えなければなりません。仕事の面においては人間関係がどれだけ発展していくか、どれだけの人間環境をたくさんつくれるかが、仕事の発展成長ということにもまた非常に大きく関係してくるわけで、特に営業畑の仕事をしてらっしゃる方々は、人間関係というものの重要性を一番感じる仕事ではないかと思います。だけどやっぱり会社の内部で仕事をしている場合でも、いろいろとお互いに人の悪口を言い合ったりなんかしてしまうようなこともあって、会社内部での人間関係というのも、より素晴らしいものにしていく努力をしないと、自分の仕事環境が悪くなっていく。仕事の面で差し支えが出てくる。「なんか会社に来るのが嫌だ」みたいなことになってしまったり、仕事の能率も落ちてくることになってしまいかねませんからね。とにかく、人間関係の問題は非常に人生において深刻です。そういうこともあって、今日は悪くなってしまった人間関係を放置するんじゃなくて、どうすれば良い人間関係に修復することができるのか。この問題を考えてみたいと思います。**

**人間関係の修復がうっかりすると単にハウツー物になってしまって、作為的な意識で人間関係をなんとか処理して…ということになっていたり、作為というと相手を自分の思うように動かそうみたいな、そういうことになってくると、やっぱりそれは少し人間関係の在り方においてはあまり良くないやり方なので…。基本的には自分自身の人間性を成長させる、人格を成長させることを通して、段々と人間関係が良くなっていくという、自分を成長させることによって人間関係が良くなっていく順当な人間関係の修復の仕方ではないかと思います。自分のことはさておいて、なんとかあいつを自分の思うように動かそうというのはやっぱりちょっと作為的で、なんかちょっといやらしいような感じで、相手においてもあまり快くない。**

**そういうこともあって、まずはなぜ我々は対立を放置してはならないのか、なぜ良い人間関係をつくって、悪くなった人間関係を修復する努力をし続ける必要があるのかの理由をちゃんと考えていかないと、人間関係の修復という問題にちゃんと誠意を持って関わっていくことができないのではないかと思うんですね。なぜ我々は対立を乗り越えなければならないのか。なぜ殺し合ってはならないのか。なぜ戦争をしてはならないのか。そういうところからも考えてみる必要があります。まず、我々の命の根源から湧き上がってくる欲求というのは、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいというものです。誰も命の欲求として対立したいとか殺し合いたいとか憎しみ合いたいとか、そういう欲求は本来命から湧いてくるものではありません。命そのものが本当に求めているものは、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいというものです。なぜそれが湧いてくるのか。それは命をつくったのは母なる宇宙の摂理の力だ。そういう人間の命と宇宙との繋がりを考えていくと、世界に存在する全てのものは母なる宇宙の摂理の力によってつくり出されたものであると言えます。そういう意味であれば、母であるならば自分の産んだ子どもたちが皆で仲良く信じ合って生きていってくれることを願っているはず。対立や戦争や殺し合うことをお母さんが見たら、本当に悲しいし、情けない、なんてことをしているんだと思うはずです。できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいという気持ちは、母なる宇宙のつくった命にお母さんが込めた願いであり、祈りであり、思いであると我々は受け止めなければなりません。**

**人間とは哲学的には、目覚めたる宇宙と言われて、また人間は目覚めたる命と言われて、人間において初めて命というものは、自覚を持った生き方に目覚めたと言われております。また人間とは目覚めたる宇宙だというのは、人間において初めて宇宙は自らを知った。宇宙とはなんなのかを自覚できるようになった。そういう意味で人間は、人間において初めて命が目覚め、人間という存在によって初めて宇宙は自らに目覚めた、そういう存在なんだと言われるわけであります。そういう意味では、我々は宇宙と人間との命の関係性を考えて、そして自分の命にどういう宇宙の思いが込められているのか。命をつくった母なる宇宙は、人間という命にどういう祈り・願いを込めたのか。それを知って、人間として正しく生きるということは、命をつくった母なる宇宙の思いを生きる、願いに応える生き方をすることに、人間としての本当の人間らしい生き方の根本原理があると考えなければならない。**

**であるが故に、我々は人間として人生を生きる上でこの母なる宇宙の願いに応えて対立を放置するのではなく乗り越えて、良い人間関係に戻していく努力をすることによって、お母さんの思いに応えることができる。そこに人間としての正しい生き方、血の通った温かな心の生き方の原点があるんだと、考えなければならない。そのために努力する…結果として人間性が成長して、人格が磨かれていく。できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいという思いを真剣に持つことによって、周りから信用・信頼され、愛されて、素晴らしい仕事ができるという良い結果に結びついていくことになるわけです。これをテクニックではなくて、自分を成長させることによって人間関係の問題を乗り越えていく…そういう生き方になっていくわけです。**

**テクニックではなくて、自分を成長させることによって人間関係の問題を乗り越えていく。これが良い人間関係をつくる・問題を処理する上で必要となる基本的な心構えでならなければならない。本を読むだけで「こうすれば良いんだ」と、知識や技術的に考えて、そういうやり方で乗り越えられるとする方もいらっしゃるかもしれませんけど、ある意味でその場しのぎと言うか、自分の能力で問題を処理していこうとするので、作為が見えるとやっぱり人間は嫌な感じがするんですよね。やっぱり人間性が成長していくと、そのことによって相手がその人に魅力を感じて、自然にその人間関係が修正されていく状況になっていくのが、一番望ましいんじゃないかと思います。そういう観点から、人間関係の問題を処理していくためには、どういう生き方をしたら良いのかを考えてみたいと思うわけであります。**

**まず悪くなってしまった人間関係を修復するということを考えた場合、何がまず問題になってくるか。嫌いな人でも好きになれるという力をつくってかないと人間関係を修復することはできません。そこでまず嫌いな人でも好きになるにはどうしたらいいのかを考える必要があるわけであります。それが第二番目に書いている「どんな人でも好きになる実力をつくる」という課題になってくるわけですね。**

**人間は不完全な存在ですから、どんな人でも好きになるのは無理な話で不可能でありますけど、だけどもやっぱり人生を楽しく幸せに生きていこうと思ったら、できるだけたくさんの人を好きになれるように努力する。たくさんの人を好きになることができる自分をつくっていく。ということが大事な努力の課題であります。嫌いな人が増えてくれば、結果として自分は不幸になってしまう。生きることが嫌になってしまう。自分が幸せな人生を生きるためにも、自分自身が多くの人を好きになれるような自分をつくっていくのは大事な努力の課題であります。できるだけたくさんの人を好きになることをしていこうと思ったら、どういうことをしていくのか。レジュメにいろはと書いた課題が生まれてくるわけですね。**

**人間は誰でも長所半分短所半分。そういう構造で人間性を持っておりますから、どんな立派な人でも必ず他人から嫌われる、また嫌がられて非難されるような面を自分自身の中に持っているんですよね。どんな人間でも短所がある。短所がなかったら人間ではない。短所がなかったら神様。だから人間には短所がなければならない。短所があっていいんだ。短所を見ると好きになれないですよね。そこで今度はどんな人にでも長所がある。どんな人でも良いところがあと半分ある。人間性というのは良いところ半分、悪いところ半分という構造で成り立っているんですね。これは宇宙の摂理の支配の結果、そういうことになっているわけであります。**

**なぜ、人間は長所半分短所半分なのか。その根拠を考えてみると、先程話した通り、人間をつくったのは宇宙の摂理の力なんですね。では宇宙の摂理とはどんなものか。これはプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、そのエネルギーがバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくっているのが、宇宙の摂理の働きであります。高校の物理学の教科書から言うと、宇宙とはエネルギーバランスだと書いてある。バランスをとって、あらゆるものをつくっていくっていうのが宇宙の在り方なんですね。そういう力で宇宙は万物をクリエイトしましたから、だから基本的に宇宙の構造は、プラスとマイナスが半分ずつあるという構造で全部できてるんですね。ですからプラスにはマイナスがあるし、陰には陽があるし、また光には影があるし、善には悪があるし、美には醜があるし、真には偽があるし、清には濁があるし、男には女、動物には植物、全部一対という対構造で宇宙は出来上がってる。人間も宇宙によってつくられたものですから、だから人間性も長所と短所が半分ずつあると考えなければならない。人間は不完全な存在ですから短所がなかったら人間ではない。人間には皆、短所があるんだ。しかもその短所は半分あるんだ。それでいいんだと言うことですね。長所も半分ある。人間が人間らしく生きるためには、長所も短所も活かして使うような生き方をしないと、本当に人間らしく生きることはできません。**

**なぜ短所が大事なのか。人間の本質は理性ではなく心だ。人間らしい心とは、謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは短所だ。短所がなかったら人間は謙虚になる理由がなくなる。人間の本質である謙虚な心をつくってくれるのは、実は短所なんです。短所を活かして使うということをしないと、人間らしい謙虚な血の通った温かな心をつくることはできません。我々は短所も大事にして、短所も活かして使うことをセントバーナードなんですね。長所は良いところですからね。普通は学校の教育なんかでは、ついつい長所は長所で良いですから、短所をなんとかしましょうとなって、なくす努力をさせられてしまう。結果として平凡な人間で終わらされてしまう。本当に人間が素晴らしい輝きのある命を実現しようと思ったら、長所こそとことん伸ばさないとならない。とことん伸ばして、他人から一目置かれるような素晴らしい能力をつくることが、まずは人間が人生を面白おかしく愉快に、命を輝かせて生きていくための大事な努力の仕方なんですね。短所を活かすとはどういうことなのかと言ったら、なくす努力をしないで「俺には短所があるんだ」と知って、決して傲慢にならないこと。威張れないところがあるという気持ちを持つことと、短所があるという自覚ができてくると自分自身が傲慢にならないで謙虚な気持ちを持つことができるようになります。これが短所を活かして生きるという生き方の基本であります。**

**とにかく、人間には長所も半分、短所も半分ある。長所も活かして短所も活かして初めて人間として生きることができる。長所も短所も活かさないと母なる宇宙によってつくられた人間らしい生き方はできない。だけども、やはり現実的には相手の短所を見ると、なんとなく好きになれないですね。現実的なことを言うと、やっぱり相手の長所を見つけて相手の長所と付き合うという人間関係の結び方、人間関係のつくり方を覚えないといけません。短所はもう誰にでもあるのだから、気にしちゃいかん。相手の良いところを見つけ出して、相手の良いところと付き合わせてもらう。会社における人使いなんかでも相手の良いところを会社が使わせてもらって、その人を会社で活躍できるように成長させてあげるのが、会社における人使いですね。短所は誰にでもあるんだから短所はあまり気にしないで、その人の良いところを見つけ出して、その良いところを会社において使わせてもらって、会社を発展させていくことに使っていく。これが人使いの基本であります。**

**とにかく、大事なことは短所はどんな人にでも半分はあるんだ。短所をなくすことを要求したら、それは人間に人でなしになれと言っていることになってしまうと。短所があっていいんだ。短所を見たら好きになれんから、長所を見て付き合うね、と。なかには「こんなやつに長所なんてあるか」と言いたくなるような人もいるかもしれません。なかなか好きになれないということもあるわけですけど。だけども本当のことを言えば、どんな人間でも良いところが半分はある。どんな人間でも他人よりすごいところが半分ある。それから、どんな人間でも他人よりダメなところが半分はある。ダメなところを見たら好きになれへんから、良いところを見て好きになる。そのためには、人の良いところが見つけ出す能力を開発していかないと人間関係を修復できませんし、また人を好きになることもできません。だけども、一旦嫌いになってしまうと良いところが見えなくなってしまって、「こんなやつに良いところがあるか」と言いたくなってしまう状況もあるんですけど。相手の良いところが見えないのは相手の責任ではない、自分の人間性の狭さ・貧しさ・未熟さというものが原因なんですね。相手の良いところが見えないときに人を責めるのではなくて、自分の人間性の幅が狭いんだという風に考えないと自分自身が成長しない。人を責めていると成長せず、嫌な人間になってしまう。人を責めるような嫌な醜い人間になってしまうのではなくて、相手の良いところが見えないのは自分の人間性に問題があると考える。見えるためには自分が成長しないといかんと考えることによって、我々は人を責めるような嫌な人間にならないで、自分自身を成長させていって人間関係を修復していくという生き方ができていくことになるわけです。そうすることによって我々は人から好かれる、人から良い人だと言ってもらえるような人間になれます。**

**よく国会なんかでも野党が与党の大臣や政治家を責めて責めて責めまくりというやり取り、国会の議論がなされておりますけど、やっぱりそれを国民が見たら、「またあんなこと言ってる」と人を責めることに対して嫌悪感を国民は意識するんですよね。だから、そういうのを見てると政治に関心が持てない、政治嫌いということになってしまっている。ああいう野党の与党の人を責める姿を見ると…人を責める人から見れば人を責めることがまさに自分自身が正しいんだというような顔つき、気構えで言っているんですよね。人を責めることを正義と考えるような風潮があります。「自分は正しい。あいつが悪い」という、自分の悪いところは棚に上げて、人を責めて責めて責めまくって、相手を謝らせようとするような醜い人間性が国会の議論の場ではつくられていってしまうんですよね。そういうところからも我々も人を責めることがいかに醜いことなのかを十分に分かって、「自分はそういう人間にならないぞ」と考えておかなければならないと思います。とにかく人を責めたくなる、人の良いところが見えてこないということは、相手の責任ではなくて、自分に問題がある。相手の良いところが見えてこない…半分も良いところがあるのに。それが自分に見えないということは、自分の人間性が未熟なんだ、自分の人間性が貧しいんだ、自分の人間性の狭さが、相手の良いところを見えないようにさせているんだ、と。だから、「俺がもっともっと成長しないといかん」という気持ちを持つことが非常に大事な人間としての生き方であります。**

**そういう努力をしながら、相手の持っている良いところを発見して、良いところを褒めてあげて、相手の良いところと付き合わせてもらう。そういう付き合い方を覚えなければならない。同時に短所はなくならないんだと。短所を見始めたら好きになれないから、短所はなくならないし、短所はなければならないし、短所はあっていいんだと。だから相手の短所を嫌だなと思うようでは、人間と付き合えない。短所をほったらかしにしておいて良いところと付き合わせてもらうという付き合い方を覚えていかないと、嫌いな人を好きになるという実力がつくれません。実際、人生はどんな人でも好きになる力をつくったら本当に楽しいですよ。楽しい心持ち、愉快な気持ちで人生を生きていくことができます。これが単純な常識的なことかも知れませんけど、なかなかこれ、やろうと思ってもできていない人が多いんです。是非このことの重要性を知ってもらいたい。人が好きになれないのは相手の責任じゃない、俺の責任で自分の責任だ。自分の人間性の貧しさ、自分の人間性の未熟さ、自分の人間性の狭さ、それが人を好きになれない自分にしているんだと。人を責めたらいかん、俺が成長しないかん、と。そういう生き方を身につけてもらいたいんです。そうすれば人生は楽しくなります。**

**二つ目のどんな人でも好きになる力をつくるためには、「現象はプラスにもマイナスにも解釈できる」漢字の言葉としては、両義性。辞書で引いてもらったらわかりますが、“どんなことでもプラスにもマイナスにも解釈できる”ということ。嫌いな人というのは、その人の持っているものをマイナスに解釈しているから嫌いになっちゃうんですよね。だけどそのマイナスに解釈していることをプラスに解釈したらどうなるかを考えると、最初は嫌いだったけどだんだん好きになってしまうという、そういうことに仕向けていくことができるんですね。**

**例えばの話、臆病な人がいてその臆病さを皆から非難されているとします。この臆病さというマイナスの評価をプラスに置き換えたらどうなるのか。プラスに評価したらなかなか用心深い、慎重だと言えます。臆病ということは「慎重な方ですね」と。皆が臆病だと言っている中で、慎重だと評価をすることで相手は何かしら自分を良い風に言ってくれるという喜びを感じて、そう言ってくれた人に対しては好意を持って接するような関係性に変わってきます。暗くて暗くてどうしようもなく暗いという人でも、暗いをプラスに評価したらどうなるか。「なかなか深みがありますね」と言ってあげたら、言われた方は嬉しいなと思い、笑顔で接することができるようになり、変わってくるかもしれない。**

**この両義性というのは、心理学的には人身操縦法に使われる原理なんですね。自分の亭主がそういう人のなってもらいたいと思ったら、そういう褒め方をすれば良いということなんですね。そのような使われ方をする原理でもあるんですね。悪く言えば「豚もおだてりゃ木に登る」ということと同様に、褒め方によっては人を誘導して違った形で成長させることができる。とにかく、どんなことでもプラスにもマイナスにも評価できるということを知ることで、ものすごい人間関係の激変をつくり出すことができるんですね。非常に理性的で冷たいというような人で嫌だなと感じている場合でも、「なかなかクールでかっこいいじゃん」なんてことを言ったりすると、「皆が俺のことを冷たいと嫌がっているのに、クールでかっこいいと言ってくれた」と言ってくれた人に対しては、温かい気持ちで接してくれる人に変わってくる。「頑固な奴だ」と言うのはマイナス評価してるんですけど、「なかなか信念がありますよね」とか「腹が据わってますね」という言い方をすると、相手は喜ぶわけですよね。いろいろと細かいことを言って、神経質でなんかせせこましいという、「嫌な奴や」と、そういうこともありますが、それをプラスに評価したら「なかなか繊細な感性の持ち主ですね」と言えるんですよね。お節介で細々したことを言ってくる場合でもプラスに評価したら、「なかなか思いやりがあって繊細な感性がありますよね」と言ってあげると相手は喜ぶわけですね。とにかく、どんなことでもマイナスにもプラスにも評価できる。全部そうなんだ。だからマイナスに評価して相手に嫌な思いをさせるよりは、プラスに評価して相手に良い思いをさせてあげる方が人生は楽しい。そういうことも覚えなければなりません。**

**こういうことができるかできないかでも人間関係がガラッと違ってくるんですよ。自分が何かしら嫌だなと思うことがあったら、それをプラスに評価したらどうなるんだということを考えてみて、実際問題、言葉や行動にして相手に関わっていく。そうしたら人間関係は急転直下、激変します。**

**第三番目の、人を好きになる力をつくっていくためには、「声をかける」ということが非常に大事なんですね。嫌いという人に対してこちらから声をかけるということはほとんどないわけですよね。ますます人間関係は険悪になり、嫌な感じになってくる。嫌な人にもこちらから朝会ったときに「おはよう」と挨拶をし始めると、だんだんだんだん人間関係が変わってくるんですね。だけど、悪い状態の人間関係の中でこちらから相手に対して「おはよう」と言って、相手は何の返事もしないで行ってしまうことが続くかもしれません。だけど、毎日毎日朝に挨拶を続けていると、だんだん相手の気持ちの中に「おはようと言われて、そのまま通り過ぎてしまうのも、なんとなくバランスが悪いな」となってきて、「こんなやつにおはようなんて言い返すか」と思っていても「おはよう」と言われたら、うっかり挨拶を返してしまったりなんかしちゃったりなんかして。そういうところから急にお互いが親しく関わるようなことになる…そういうこともよくあるんですね。近所に住んでいる人との関係でも、お互いに挨拶をし合わないと「なんとなく、あいつ嫌な奴やな」と思っているんですけど、どこかで気があって挨拶し合うようになってくると、突然、「あいつも良いやつだな」となってくるんですよね。挨拶ひとつで嫌な奴から良い奴に変わっていくという変化が出てきます。声をかけない間は嫌な奴なんですけど、挨拶し始めると良い奴だったという変化が出てくる。この声をかけるということは、原理的には心の橋を渡す行為と言うんですよね。声をかけないと心の橋は渡れない。心は通わない、通じ合わない。だから、会社でも挨拶は大事なんだと言われるわけなんですね。必ずお互いに挨拶をし合いましょう、と。大きな声で挨拶し合いましょう。なぜ挨拶が大事なのか。挨拶をしないと心の橋が渡れない、心が切れるんですね。しないと、「嫌な奴や」という感じになってくるんですよ。**

**だから、嫌いな人に対しても嫌いという状態で放っておきたくない、良い人間関係に修復していきたいと思ったのなら、嫌いな人に対してもこちらから勇気を出して積極的に朝会ったときに「おはようございます」と声をかけることができるかどうか。これが悪い状態で放っておきたくない、なんとか修復したいという意欲が自分にあるんだと相手に知らせる働きになります。とにかく、声をかけるということが人間関係修復に非常に大事な原理だと。声をかけ合う、声をかけることによって、関係は修復できるという大きな力なんですね。挨拶が大事というのは、そういうことから言われることであります。声をかけるとは心の橋を渡す行為だ、人間関係が悪くなってしまった場合、どちらからまず相手に声をかけるか。声をかけることによって声をかけた方が人間関係の修復を強く願っていると相手に分からせる・知らせるということになっていくわけですね。そういう意味で声をかけることの重要性というのは、そういう風に理解して是非、積極的に実践してもらいたいと思います。**

**次は「悪化した人間関係を修復する実力」の二番目は、「誰からでも好かれる実力」。これは、どんな人でも好きになる実力と、誰からでも好かれる実力は、一対の原理なんですよね。誰からでも好かれることはやっぱり不完全な人間においては無理な話で、絶対そんなことはないんですけどね。ひとりでもより多くの人から好きになってもらえる自分をつくることは、これもまた本当に人生を幸せに生きていこうと思ったら大事な努力の課題であります。誰からでも好かれる自分というのは、違った言葉で言えば“人間的魅力の形成”。魅力のある人間になる…魅力とはなんなのか。魅力というのは、人に感動を与えることができる要因のことです。人間的魅力というのは人間が持っているさまざまな要素の中で、人を感動させることができる要因を魅力と言うんですね。魅力とは人を感動させることができる要因である。人を感動させることができる力をどれだけ持つか、これが人間的魅力の形成。そのことによって誰からでも好かれる自分をつくっていくことができる。**

**世間では感動することが大事だと言われますが、それは私みたいに喋っている人間からすれば、私が喋ってることに感動してくれたら私の方は嬉しいと思いますが、感動する力というのは受け身の消極的なものであって、感動というのは命の自然の働きなんですよね。本当に人間の人生において大事なのは、もちろん感動する力も大事なんですけど、もっと大事なのは感動させる力なんですよ。人を感動させる力を持って人間力と言う。感動するのは命の自然の働きだ。人間というのは文化をつくる動物と言って、自然にあるものに対して人間の手を加えて、自然のままよりももっと素晴らしいものにしていくことが文化をつくるという活動なんですね。人間は文化をつくる動物と言って、人間は自然の中で生きてるんじゃなくて、人間というのは自分がつくった文明とか文化とか歴史の中で生きるというのが、人間的な生き方の環境であります。人間は文化をつくる動物なんだ。感動するというのは自然の働きなので、感動する力をさらにそれを人間力にしていこうと思ったら、人を感動させる力を持たないと、人間的な実力と言えるものはつくれないんですね。**

**プロというのは金をもらって仕事をするんですけど、プロはできることならば、自分に合ってる仕事において客を感動させてこそ初めてプロだ。客にさすがと言わせて初めてプロだ。それによって初めて堂々と金が取れる。客にさすがと言われないような半端な力で金を取ろうなんてことは、おこがましいことだ。そのようにプロは考えていなければなりません。プロというのは、今自分のやっている仕事の素晴らしさを一番よく知っているということですからね。プロの仕事はその仕事をしながらその仕事の素晴らしさ、魅力・意味・価値をちゃんと客に感じさせて、「なんてすごい。なんて素晴らしい仕事の仕方なんだろう」と客に思わせて感動させるというのが、プロの値打ちのある仕事の仕方であります。とにかく、プロというのは客を感動させてこそプロ。そういう気持ちをプロは持っていなければなりませんし、客にさすがと言われることを目的にして、自分の能力や人間性を磨いていく努力をする必要があるわけであります。「これだけの仕事をしてくれたんだ、これぐらいの金は当然」と思わせて初めてプロなんだ。値引きを要求されたり、値下げを要求されたり、負けろと言われるようじゃプロの仕事として恥ずかしい。本当のプロならば、要求される値段よりもチップでも弾もうかと思わせてしまうぐらいの仕事をして、初めてプロだと言ってもいいようなものなんですよね。客にさすがと言わせて初めてプロという気持ちは、全社員が常に持ってなければならない大事な仕事の仕方であります。**

**そういう意味で何らかの形で、自分の中に能力や人間性において、人からさすがと言わせるようなものをつくっていくことが、プロの責任・自覚をつくるための大事な課題であります。何をもって俺は人にさすがと言わせようか、それを考えていなければならない。実際問題、人にさすがと言わせるようなものを持てば、本当に自分自身もすごく楽しい人生になってきますし、生きがいも出てきます。決して人にさすがと言わせるのは、人のためじゃなくて自分のためなんですよね。自分が幸せな生きがいのある素晴らしい人生を生きていくため。これはプロとしては避けがたい目標なんですね。**

**人間的魅力の形成、人間的魅力はどういう風にして自分の中につくっていたら良いのか。人間的魅力というものには三つの種類があります。これは人間というのは、理性・感性・肉体という三つの要素からできておりますから、人間には理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力の三つ魅力のフィールドがある。理性的魅力の中にも三つの内容があって、感性的魅力の中にも三つの内容があって、肉体的魅力の中にも三つの内容があります。三つの領域の中にそれぞれまた三つずつの具体的な魅力の原理があるんですね。これは3×3=9ですよね、いわゆる銀河鉄道999と言います。全部で九つの人を感動させる要因が人間にはあります。**

**理性というフィールドの中で人を感動させることができる力とは三つあって、知識の量、知恵、天分が理性の中で人を感動させることができる要因であります。人間は並外れた知識量に感動する。「なんていうことまで知っとるんや」と、本当に舌を巻くほどの知識量をプロであるならば、持ってないといけない。自分のやっている仕事に関しては「なんとよく知ってるな」と客にそういう思いをさせる。そういうものを持っているのがプロだ。そういう並外れた知識量が人を感動させる。**

**続いては知恵。命から湧いてくるものですが、皆が「どうしたらいいかな」と困ってるときに「こうしたらどう？」と言える…これが知恵なんですね。その知恵に感動するわけですね。**

**続いては天分。どんな人間にでも生まれながらに与えられている、その人独特の力というものが天分。どんな人にもあると言える証明は、顔が違うということ。他の人間にはない独特の才能・能力があることを証明しています。天から自分に与えられた使命のような、能力を与えられて生きていると言えます。人間に生まれながらに与えられているもの。そして、天分のツボにはまったら、笑いが止まらない人生ですよ。どんな人にも自分の命に潜在している天分を顕現させたなら、笑いが止まらない人生が始まる。天分というのは命に与えられている潜在能力です。潜在能力というのは、ただ生きているだけで出てこないんですよ。潜在能力を引き出すような努力の仕方をしないと、潜在能力・天分は出てきません。**

**まず天分はどういうものなのかを説明すると、生まれながらにその人に与えられているその人独特の能力。どんな人にも天分が存在すると証明できるものは顔です。顔は個性の象徴ですから。では、なぜ顔と天分は関係があるのかと言ったら、顔の形を決めるのは遺伝子なんですよね。遺伝子で人間の顔の形が決まってしまう。自分ではつくれない、遺伝子で決まる。遺伝子、これはなんなのか。遺伝子とは能力が物質化したもの。だから、潜在能力と言うんですね。これは最近のヒトゲノムの研究からわかってきたことなんですが、遺伝子とは能力が物質化したもの。これにより顔の形が決まり、それはつまり全人類皆、顔が違う。つまりそれはどういうことかと言うと、顔が違うということは俺は他の人にはない能力があるということに。俺にしかない、俺独特の能力が命にはあるんだということを証明するのは顔なんですね。他の人よりもダントツに優れたものが、必ずあるんだと。それを命から引っ張り出したら、完全に天分のツボにはまる。笑いの止まらない人生が始まる。**

**では、どうしたら自分の命に潜在する天分を顕現させて引っ張り出して、笑いの止まらない人生を生きることができるのか。その方法はただひとつ、限界への挑戦なんですね。今、自分の持っている力の限界に挑戦する。普通の人は今、自分の持っている力でできることしかしようとしない。だけども、それでは天分は出てこない。今、自分の持っている力でできないこともできるようにしていこうとする努力をすると、命に潜在する独特の能力が出てくるんです。限界への挑戦によって、どんどん自分しか持っていない独特の力が出てきてくれるんですね。アスリートなんかでも自分の記録を伸ばそうと思ったら、自分の持っている記録に挑戦する。今、自分の持っている力でできないことでも、できるようにしていくという気構えのある生き方をしていかないと、本当の自分の持っている底力・天分が出てくることはありません。その天分が出てくれば、確実に人を感動させますよ。それが理性の領域で人を感動させる要素であります。**

**次は感性です。**

**感性的魅力人間にはあるもの、これはなんなのかと言ったら、意志の力と愛の力と人間性。人間はの意志に感動する。物事を諦めないで最後までやり遂げる力、この強い意志の力に感動する。また、人間は深い愛に感動する。そして三番目は、人間性の持っている魅力、人間性の魅力に感動する。**

**強い意志の力に感動する。では、強い意志のある人間になるにはどうすれば良いのか。命から抑え難き欲求が沸いて来なければならない。人間は命から欲求が湧き上がってくる限り、行動し続ける。命から欲求が湧いてこなくなったら人間は行動を止める。意志の強い人間は、実は欲求・欲望の強い人間なんだ。命から湧き上がってくる興味・関心・好奇心・欲求・欲望…それが人間を意志の強い人間にする原理なんですね。意志の強い人間は決して理性的な人間ではない。本当に意志の強い人間は欲望の強い人間、欲求の強い人間だ。ある場合にはコンプレックス…人に対する恨みとか見返してやるという気持ち、負けたくないという欲求も人間において強い意志の原理になります。多くの競争をして勝ち負けを争う領域、世界においては、「あいつに負けたくない」という気持ちが、成長の原理になっている場合もあります。**

**とにかく、意志の強さ、の意志を持とうと思ったら、命から湧き上がってくる抑え難き欲求を持つ必要がある。なかなかその抑え難き欲求は湧いてこないのが、現代人の大きな問題点であります。「何がしたいの？」と聞いても「いや、別に…」と返ってくることがほとんど。全然やりたいことがわからない。なぜ、やりたいことがわからないのかと言ったら、学校において知識や情報ばかり学んで、物事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考えることがなかったんですね。知識や情報ばかりに支配されて、知っていることしかしようとしない。わかっていることしかできない。そういう状況になってしまって、命から激しい欲求が湧いてこなくなってしまった。**

**どうしたら激しい欲求が湧いてくる人間になれるのか。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。燃えないんですね。燃えるのは感性だ、理性では燃えられない。やる気というのは…心は意味と価値を感じる感性だから、意味を感じたらやる気になる。価値を感じたら命が燃える。そして、最高に意味や価値を感じたら人間は必ず「俺はこのためなら死ねる」と思えるんですよ。恋愛なんかでも本当に相手を好きになって、本当に相手に惚れ込んで、本当に燃え上がる状態になったら、「こいつのためなら死ねる」と思えるんです。多くのお父さんお母さんは、「この子のためだったら死ねる」と思って子どもを育てました。本当に愛すれば、死ねるというところまで行けるわけですね。職業愛でも本当にその仕事の魅力を知れば、「俺はこの仕事のためなら死ねる」と思えるんですよね。これは最高の人生ですね。死んでしまったらおしまいですから、「死んでもいい」と思えるものを持って生きるほど素晴らしい人生はないわけですよ。本当の意志の強さをつくっていこうと思ったら、惚れなければならない。意味や価値や値打ちや素晴らしさを感じないと、行動力、実践力が出てこない。何かしら自分の命から湧き上がるものをつくろうと思ったら、我々は理性を手段能力に使って、今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさや凄さを考えるんですよ。それを理性で考えると、燃える感性がだんだん成長してくる。感性がそれらのものを感じたとき、命に火がつく、燃えてくる。もう止められない、止まらないかっぱえびせん状態になってくるんです。自分が納得するまでやり通す、寝食を忘れるくらい没頭するまでになれるわけですね。意味と価値を感じないと、全然やる気にならない。行動力は出てこない、没頭できない。とにかく、意志の強い人間になるためには、我々は今自分でやっていることの意味や価値や値打ちや素晴らしさ、凄さをちゃんと感性で感じることが大事なんですね。**

**また、人間は深い愛に感動する。それはなんなのか。愛は理屈を超える力です。相手のために努力をして、見返りを求めないというのが純粋の愛の原理であります。相手のために努力して見返りを求めない、愛というのは努力によって示されるもの。相手のために努力する気持ちがなかったら、相手のために努力する気持ちがなくなったら、愛はなくなったんですよ。相手のために何か努力する気持ちがある限り、愛は存在する。愛の存在を証明するものは努力なんです。相手が自分のことをどの程度愛してるかを知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかを見れば、相手がどの程度自分のことを大事に思い、愛しているかがわかるわけです。また、自分が相手のことをどの程度好きなのかを知ろうと思ったら、自分が相手のためにどの程度の自己犠牲的努力を払えるか。それにより、どれだけ好きかがわかります。ここまでできても、これ以上は無理…というのは、その程度の愛なんですよ。愛は努力によってしか証明されない。**

**自己犠牲的努力を払いながらも相手に見返りを求めない。見返りを求めるのは、理性的な判断。愛は理屈を超える力ですから、相手のために尽くして尽くして尽くして何一つ見返りを求めない、それが純粋な愛なんですね。よく映画なんかでも、愛する男性がピストルで撃たれて死んでしまうような状況になったとき、発射されたと同時にその男性を愛してる女性が前にパっと飛び出して、その女性が弾に当たって倒れるんですよね。そうすると、そのことによって助かった男性は、その女性のところに飛んで行って、抱きしめながら「大丈夫か！」と言う。その愛する男性を救うために、飛び出した。弾に当たって倒れた自分を愛する男性が抱きしめてくれている…その状態で女性はニッコリする。「ありがとう」と言って、カクンと死んでしまう。しかし、その死に顔に喜びがある。これが見返りを求めない愛の行為と言えます。そういうものを映画なんかで観ると我々はものすごく感動するわけです。親が子どものために必死になって頑張る姿も然り。相手のために頑張って見返りを要求しない行為に感動する。これが愛の感動。本当に好きになれば、本当に惚れ込めばそういう見返りを求めない愛を実践できる。周りを感動に引きずり込むことができるわけです。**

**三番目は人間性の魅力です。人間性とは、原理的には性格と人格が有機的に結びついて形成されます。性格は生まれながらにその人に備わっているものであって、性格は自分でつくれないんですね。気がついたらこんな性格になっていた…なっちゃんジュースなんですね。なってしまうものです。人格は生まれ持っている人間はいない。生まれた後に努力してつくっていくもの。人間性というのは、生まれながらに備わっている性格と、生まれた後に自分でつくっていく人格のふたつの格が有機的に絡み合って、つくられるものです。この人間性に魅力を持たせようと思ったら、どういう努力をセントバーナード。**

**人間性の魅力はどのように出てくるかと言うと、性格は直接的には絡んでこない。つくろうと思ったら人格に着目。人格には高さ・深さ・大きさがあります。それぞれをつくる努力をすると人格が成長して、人間性に魅力が出てくる。人間性とは、「なんてあの人は深い人なんだ。なんて高貴な人なんだ。なんてあの人は度量が大きいんだ」と感動するわけですよね。人間性において感動をつくり出す原理は、人格の高さ・深さ・大きさという三つのもの。これを目的にして努力しないと、人間性の魅力において人を感動させる人間にはなれない。**

**最後の三番目に肉体的魅力があります。肉体的魅力は具体的に三つの魅力があります。**

**第一番目は、肉体的魅力と言ったら言わずと知れたみたいなことで、顔が綺麗とかプロポーションが良いとか、かっこいい服装をしているとか、いわゆる外面的な魅力、それを総称して容姿の魅力と言うんですね。形あるものは皆、美を求める。肉体というのは形があるので、形あるものは美を求める。人間という肉体も美を求めていく。それをすることによって人を感動させることもできるわけです。**

**第二番目は、目つき・表情・態度、目の魅力。目に表情に態度に魅力があるかどうか。よく「あの人の目がたまらん」という憧れ方があって、舞台の俳優さんなんかでもその人の流し目で見られるとゾクゾクとするなんて言う奥様方もいらっしゃる。それだけ人間にとっては目は大事なんですね。人間関係は目で決まる。どういう目で人を見るかによって、その人との人間関係が決まる。見下すような批判するような責めるような目で見れば、人間関係は壊れる。だけど、相手を尊敬するような、相手を好きだと思うような、相手を称賛するような目で見れば、人間関係は良くなる。人間関係は目で決まる。目を磨いて、鍛えることが素晴らしい人間関係をつくる上で大事な努力の仕方であります。目に魅力…それは結局目に愛があるかどうか。どんなものを見る場合でも我々は目に愛を讃えて、見つめることが大事であります。感性論哲学では、「いつも目に愛の光を」「いつも目に愛を忘れず」という言葉があるんですけど、そういうことも目の修行に大事な課題であります。目を表情を態度を磨いていく。そのことによって人を感動させる生き方ができていきます。これは昔の日本においての武士の生き方なんかでもあるように、武士が端座している姿勢の凛々しさに感動するなんてこともあったようです。**

**第三番目は、立ち居振る舞い、行動の美学。人間は動物ですから、動きの中に美を追求することを必然的にやってしまう。だから、パフォーマンスで人を感動させることがよくあると思います。歌とか踊りの世界に振付師という方がいて、振付師は、見る人を感動させるような振り付けをするわけですね。人をゾクゾクとさせるような振り付けをする。日本では昔、女性の方は結婚されるときに行儀作法を見習えと言われていました。立ち居振る舞い、美しさをちゃんと習い、相手の家に嫁いだときに自分が出てきた家を辱めないようにと。自分の家が尊敬され評価されるために、品格のある美しい作法を教わって嫁入りすることがありました。人間は動物ですから、動きの中に美がなければならない。**

**女性の方の歩き方なんかでもウォーキング、歩く姿が美しいということも評価されます。単にこれはファッションショーにおけるだけではなくて、日常の歩き方においても歩く姿、立ち振る舞いが美しいというのも人間の評価として大事なものです。それが感動を呼ぶということもあるわけであります。仕事をしているときに仕事をしているその姿が美しいとか、そういうこともよく言われることがあります。立ち居振る舞い・行動の美学ですね。そういうことも我々は自分というものの品格を高めるために、考えていかなければなりません。とにかく、人間というものには人を感動させることができる要因が9つある。3×3=9→銀河鉄道999ですね。9つの魅力の中でどれを自分の魅力にしようか。プロならば何らかの点で客を感動させる力がなかったら、プロではないと。どういうところでさすがと言わせる俺になろうか。そういうことのために人間としての魅力づくりを考えてみてもらいたいと思います。**

**それでは休憩に入ります。**

**それでは後半の話に入ります。先ほどは第三番目まで話しましたので、今度は第四番目ですね。「悪化した人間関係を修復する実力」をつくるために次に考えなければならないことは、「対立を乗り越える実力」をどうつくるかということですね。これまで人類は対立という状況が生まれてきたときにどのようなことをしてきたか。これまでの対応方法というのは、五つあったんですね。対立という状況が生じたときにまず我々が試みるのは説得するということ。説得して、そして自分が正しいと思うことを相手に分からせて、そして相手を自分と同じ考え方に導いて、対立をなくす。説得は相手の個性を認めないで、自分の考えを相手に押し付けるということですので、ついつい相手は説得されまいとして、説得されたくないと思って対立という心情が強まってくるということになる場合もあります。そういう意味では説得というのは、これからの個性の時代を迎えて、いろんな考え方があって良い、いろんな価値観があって良い、いろんな宗教があって良いという時代においては、説得という方法は本当に対立を乗り越えるためには、ふさわしくないと言うことができる。これからは個性を認め合いながら生きていかなきゃならん時代に入りますので、これからの時代においては、あまり役に立たないと。**

**説得できないと次は妥協点を模索するということがなされます。妥協は本当は気が済まないんだけど、一応仲良くやっていくためにお互いが歩み寄って、お互い我慢して、落とし所を見出すこと。結局、薬局郵便局と申しましょうか。結局のところで、お互い我慢することが我慢できなくなって、また元の木阿弥に戻ってしまう…これが妥協というものの常であります。**

**中東地域のイスラエルとパレスチナの不毛な、長年続いてきた戦争なんかでも、多くの人物は仲立ちをして妥協点を模索して平和つくる努力をしましたけども、結局妥協というのはお互いが我慢して歩み寄る状況ですので、結局我慢できなくなって、また戦争になってしまう…。そういうことが繰り返されてきたわけですね。そういう意味では、妥協も根本的な対立の解決の仕方ではない。説得もダメ、妥協もダメ…次はどうするかと言ったら、相手が強いと思ったら寄らば大樹の陰のように、相手に媚び従うという、相手に擦り寄り、そして自分を虚しくして相手に従う…そういう形になって当面の対立という状況をなくすこともできます。これもやっぱり媚びへつらうこと自体が、自分を虚しくして相手を立てるみたいな、我慢しなきゃならんから我慢ができなくなって、また壊れる。寄らば大樹の陰というものも結局はまだ火種を残す、対立の心情を本当になくすことができない。**

**説得もダメ、妥協もダメ、相手に媚びへつらうのも本当の解決ではないと。では、四番目に何が来るかと言うと、対立という状況において、相手が逃げるという形で対立を避けて通ることもできます。国際関係においては鎖国という国交を断つという対立の状況から逃げる、そういうこともなされるわけです。けど、なかなか逃げても問題そのものは残っている。逃げ切れない、問題がなくなりませんので、またその問題が出てくることになります。繰り返し対立の状況を迎えることになってしまう。**

**最後の五番目は、どうしようもなくなった最後は、喧嘩や戦争だということで力で相手を屈服させるということが行われているわけであります。現在の国際法においては、どうしようもなくなったら戦争をしても良い。これが今日の国連が認めている国際法の現状であります。国際的な問題解決をする最終的な手段として、戦争という方法もやむを得ないというのが、現在の世界の現状であります。だから、問題がこじれてくると最終的には戦争という状態で軍隊を派遣して、相手の国を制圧する…そんなことがまだまだなされているわけですね。必ず負けたものの恨みを買って、現在アメリカがイスラム原理主義のテロに怯えているように、永遠に恨みの仕返しがなくならない。**

**ということで、今日人類が持っている対立の状況に対する対応方法である、説得も妥協も媚びへつらいも逃げも戦争も決して本当に問題を解決する方法ではないということが、はっきりしています。人類はまだまだ対立に苦しんでいるのが現状であります。本当に対立を解決して、良い関係をつくっていこうと思ったらどうしたらいいのか、もう一度考えてみなければならない。本当に対立を原理的に乗り越えて、良い関係をつくっていく力を我々が求めるとするならば、まずは対立とはなんなのかということをちゃんとちゃんとの味の素と申しましょうか、ちゃんと考えていかなければならない。**

**対立はなぜ生じるのか。生まれながらに対立することはありません。生まれた後に後天的につくられてくる関係性だ。どのように後天的につくられていくのか。そこで、対立が出てくる原因が五つあります。**

**それは、体験が違うと対立をする。体験が違うと考え方が違ってきますよね。また経験が違うと考え方が違ってくる。体験と経験、ちょっと似てるが大きく違うというもので、昔金八先生の武田鉄矢さんがマルちゃんのコマーシャルでやってたんですけど、「赤いきつねと緑のたぬきちょっと似てるが大きく違う」のコマーシャルですね。同じ即席麺なんですけど、キツネとタヌキの違いというのは、ちょっと似てるが大きく違うと。体験と経験もそうなんですね。**

**体験と経験も英語で言えば、両方ともエクスペリエンスなんですけど、日本語で言えば全然違うんですよね。体験というのは自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのはその体験から自分が何を学びとったか。体験と経験は次元が違う。ですから同じことを体験しても、その人の能力や人間性によってその体験から何を学ぶとるかっていうように内容は違ってくるわけですね。体験と経験は別のもの、違う次元のものとして考えなければなりません。体験が違うと考え方が違って対立をする。また経験が違うと考え方が違って対立をする。**

**三番目は持っている知識情報が違うと対立をする。四番目は物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。最後の五番目は人生のさまざまな出会いが違うと考え方が違ってくる。どういう災害と出会ったか、どういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう人物と出会ったか、どういう本と出会ったかなど、さまざまな出会いによって人間の考え方や価値観など、いろんな違いをつくってくる原因になるものであります。**

**対立という現象は、自分が持ってない体験か経験か知識情報か解釈か出会いを相手が持っている。自分にない何かを持っているのが対立の原因なんですね。人間が成長しようと思ったら、同じ考え方の人間と付き合っていても成長はしない。楽しいし愉快で気楽なんだけど、同じ考え方の人間とばかり付き合っていたら成長しない。成長しようと思ったら、我々は自分にないものを持っている人間と付き合って、自分にないものを相手から学び取らないと成長することはありません。そういうことを考えていくと、対立とはなんなのか。対立とは俺にないものを持っている人間が誰であるかを教えてくれる現象。そのように我々は対立を理解しなければならない。対立という現象は、俺にはない体験や経験や知識情報や解釈や出会いを相手が持っているということを意味しているんですね。そして、自分が成長しようと思ったら自分にないものを相手が持っているんだから、自分にないものを相手から学んで自分が成長していくということを考えなければならない。すなわち対立というのは、自分が成長するために学び取らなければならないものを持っている人間が、誰であるかを教えてくれる現象なんですね。**

**対立という状況が出てきたならば、我々はまずどういう風なことを意識する必要があるか。対立とは、自分が成長するために学び取らなければなないものを相手が持っているんだな、という風に思わないといけないということです。そして、自分にないものを相手から学んで、そして自分を成長させていく。そのために対立は出てきてるんだと理解しなければならない。対立がないと、自分にないものを持っている人間が誰かを知ることができない。対立して初めて、「この人は俺にない何かを持っているんだな」とわかるわけですね。**

**一般的に言って、問題（対立）はなぜ出てくるのか。厄介な問題はなぜ出てくるのか。問題は自分・会社・社会を成長発展させるために出てきている。なぜかと言えば、問題がなかったら「問題がないんだから何もせんでもいい」、でも、問題が出てくることによって「何とかしないかん」ということになって、人間は成長することができるんだ。問題も悩みも成長させるために出てきてくれてるという判断をする必要がある。対立もやっぱり問題の中に入っていて、何のために出てくるのか。それは「俺を人間として成長させるために対立という現象は出てくるんだ」。そして、対立から自分は何かを学んで成長していく。そのことが、対立という状況の中で自分に求められているんだ。対立なしに人間は成長することはできない。人間の成長のために避けて通れない、なくてはならない大事な現象だ。対立を避けていたのでは、成長はしない。対立を迎え入れて、対立を通して、自分にないものを相手から学ぶことをしないと、我々は自分自身を人間として成長させるということにならないんだ。対立という状況で一番問題なのは、感情的対立なんですね。感情的対立というのは、自分が相手のことを「嫌な奴や」という意識で見てみてしまう。また相手もこちらに対して敵対心を持って対応してくる。これが絡み合って、対立という状況はどんどん深刻化していくわけですね。自分が相手に対して持っている対立心と相手がこちらに向けてくる敵対心、これが噛み合って対立が激しくなっていってしまう。**

**本当に対立を乗り越えて行こうと思ったら、我々はまず自分が相手に対して持っている対立心、敵対心をどのように乗り越えるかを考えなければならないし、また二番目にはどういう風にしたら、相手が自分に向けてくる敵対心を取り除いていくことができるか。これを考えていかないと感情的対立を乗り越える実力は身につきません。人生の中で一番厄介なのは感情なんですよね。感情的対立に陥ると物事は泥沼化してしまうんだ。単に考え方が違うだけなら、「そんな考え方もあってもいいよ」と放っておけるものも、感情が絡んでくると物事は深刻化する。なかなか感情的対立を処理する・乗り越える力を持てないで皆苦しみ悩む。**

**本当に対立を乗り越える実力をつくっていこうと思ったら、まずは感情的対立をどう処理するか。感情をどう処理するかが深刻な問題であります。まずは感情の問題を解きほぐしていく順序は、自分が相手に対して持っている敵対心を除去して、その次に自分に向けられる敵対心を除去する。この順序が大事。まず相手に謝らせて相手が悪いと認めさせるようでは物事は解決しません。相手の気持ちを変えさせるにはまずは自分から。人を責める気持ちがある分だけ、自分は成長しない。なかなか人間は問題が起こったときに自分の問題点から処理をして、そして次に相手の問題点にかかることができなくて、対立という状況が出てくると、ついつい相手を責めてしまう。お互いが相手を責めるという状況から始まってしまうんですよね。だからなかなか対立は乗り越えられないで残ってしまうんですね。大事なことは、対立は自分を成長させるために出てきてるんだという、この理解がまずは大事なんですよ。問題・対立は自分を成長させるために出てくる。自分を成長させようと思ったら、まず自分の問題点に気づかないと成長しないんだ。人を責めてる分には自分は成長できない。ここをちゃんと抑えることが、まず対立を乗り越える実力を自分のものにするために大事な出発点。自分の問題点に気づかないと俺は成長できない。人を責めてる間は自分は成長しない。人を責める気持ちの部分だけ人は成長できない。このことをちゃんと抑える必要がある。**

**そして順序としては、自分にもこういう問題があると思います。それでもあなたにもこういう問題がありますよね。と言って、まず自分の至らなさ、自分の間違いをまずは相手に伝えてしゃべって、そして自分の問題点をまずはちゃんと自分を認めて、その次に相手の問題点に移っていく。そういうことをしていかないと、感情的対立はほぐれないですね。そのことのためにどういうことをする必要があるか。まずは自分が相手に持っている敵対心を除去する。自分の意識を取り除いていこうと思ったなら、どうするか。**

**先程私が申し上げたように、対立は自分を成長させるために出てきてる。自分にない何かを相手が持っているということなんだ。自分が成長するためには相手から自分にないものを学ばなければならない。そういう気持ちになることによって、相手を敵として嫌な奴として見るんじゃなくて、「この人から何かを学ばなきゃいけない。この人から何を学んだらいいんだろう」そういう気持ちになる。その気持ちが自分の目に現れてきて、変化する。この目の変化が相手のこちらに対する気持ちを激変させるようになる。「あいつの俺を見る目が違うな」と変わってくる。相手にそういう意識を与えて、その結果として相手のこちらに対する姿勢が変わってきます。結局、人間関係を支配するものは目だ、と。目を変えるために意識を変える。意識を成長させないと目は成長しない。これが対立を乗り越えるための実力をつくっていくための具体的な方法であります。**

**入り口は、まず自分が相手を敵として見る目を変える。その次に相手から自分に向けられる敵対心を除去する。そのためには三つのことを自分の意識の中でちゃんとわかってる必要がある。人間は誰でも愛されたいんだ。人間は誰でも認めてもらいたいんだ。人間は誰でも褒められたいんだ。誰でも信じてもらいたいんだ。そういう気持ちがどんな人間でもあるというのをちゃんと知って、今自分の目の前にある敵も愛されたいんだ・認めてもらいたいんだ・褒めてもらいたいんだということを意識しながら、相手に関わるのが大事なことです。**

**二番目に大事なことは、自分と違う考え方を嫌だと思うんじゃなくて、自分と違う考え方や価値観に対して「なんでそういう考え方になったんだろう？なんでそういう価値観になったのだろう？それが知りたい」と。異なるものに対する興味や感心や好奇心を持つことが、大事なんですね。第三番目は、今自分の目の前にいる自分と違った考え方を持っている人のことを、本当に誤解することなく正しく理解する力と人間性を俺の中につくってかないと、ビッグな人間になれないという成長意欲を持つこと。この三つが相手がこちらに向けられてくる敵対心を除去していくための前提となる原理です。こちらが相手を見る場合、相手もやっぱり好かれたいんだ・認めてもらいたいんだ・褒めてもらいたいんだ。皆、その気持ちを持っているんだ。**

**次、二番目は、嫌だと思うのではなくて、興味や感心や好奇心を持つこと。「どうしてそういう考えになったんだろう、俺は知りたい」と。そういう気持ちになること。個性の時代を生きるためにどうしても必要なんだ。自分と違う考え方を認めて許さないと個性の時代は生きていけませんよね。自分と違うことを嫌だと思っておるようでは個性を認める人間になれませんよね。個性の時代を生きていこうと思ったら、自分と違うものに出会った場合に、「なんでそういう形になったんだろう」「どうしてそういう価値観を持つことになったんだろう」「知りたい」という認識欲を持って相手に接することが大事。**

**三番目は、「誤解することなく正しく理解する力と人間性を俺の中につくってかないと、ビッグな人間になれない」。人を責めることなく、自分を成長させるために。これらが相手の敵対心を除去する前提条件であります。**

**その次にどうするか。どうしてそのような考え方を持つようになったかの理由が知りたい、それを相手から教えてもらう。納得するまで質問をする。そうして理解をすれば、最終的にこちらを敵として見ていません。「こいつは俺のことをちゃんとわかってくれようと努力をしてくれている。嬉しい」というような思いになり、敵対心は消えています。これが感情的対立をなくしていくための努力の仕方なんですね。これで具体的な対立を乗り越える実力がつくられていくわけであります。そして相手からいろんなことを学んで自分を成長させていって、「今日は君と出会えてよかったです。このことを学ぶことができて、こんなことに気づいて、成長できました。ありがとうございました」と敵に感謝ができるようになる。そういう人間的成長が対立を乗り越える実力をつくろうとする努力によって出てくるわけであります。このようにして今までなくすことはできなかった対立という関係性を乗り越えていくことができるわけであります。**

**これまでの人類の対立という状況に対応してきたやり方は、説得か妥協か媚びへつらうか逃げるか戦争の五つしかなかった。これでは対立を乗り越えることができなかった。そこで感性論哲学では、対立というのは自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間は誰であるかを教えてくれる現象なんだ、と解釈する道を拓いた。まだ残念ながら世界には、対立というものをそのように理解してる人が誰もいないんですよ。相手から学ぼうとする気持ちは全くなく、こちらの言うことを相手が受け入れなかったら戦争して殺しちゃうという時代なんですよ。殺してでも自分のいうことを相手に受け入れさせようとする力の支配が国際社会には存在するわけですよ。中国でもアメリカでもロシアでも全部そうなんですよ。相手から学んで自分を成長させようという形での対立の乗り越え方を誰もしてないんですね。とにかく、自分のことを相手にわからせよう、認めさせようと、そういう議論や論争ばかりが行われていて、相手がこちらの言うことを認めなかったら力で認めさせる。結局、戦争で殺すこともあるわけですね。これが今の国際社会の現状なんですよ。**

**なんとかこれを乗り越えないと、我々が望む平和な世界をつくり出して、安心して生きる時代を迎えることは出来ません。常に戦争の恐怖と背中合わせで生きていかなきゃならないような状況が続いてしまいます。一時も早く、対立という状況が生まれたときに自分は相手から何か学んで、自分を成長させなきゃならんのだな、対立は俺を成長させるために出てきてくれている現象なんだな、という理解の仕方を人類がいつ持つことができるようになるかですね。それがなかったらね世界に平和はやってきません。単に世界の平和だけの問題じゃない。我々は一人ひとりが抱えている人間関係の悩みを乗り越えていく力を持つためにも、対立に対する新しい解釈、対立とは「自分が成長するために学び取らなければならないものを持っている人間が、今俺の前にいるんだということを教えてくれる現象なんだ。この人から一体何を学んだら良いのだろう。この人はいったい俺にない何を持っているんだろう。俺は知りたい」。そういう気持ちになれるかどうかですね。これは、離婚の激増を食い止めるためにも、幼児虐待を防ぐためにも、いろんな人間関係の対立を乗り越える実力を自分が持つためにも対立解釈が今必要だとわかっておいてもらいたいと思います。**

**次は問題解決能力をつくる。問題解決能力をつくると対立という状況だけではなくて、さまざまな人間関係の悩みと苦しみというものをどういう風に乗り越えていったらいいのかということになるわけです。問題解決能力をつくるためには、問題とはなんなのかをちゃんと分かってないといけない。先ほど申し上げたことですけど、問題というのは、自分を成長させるために出てくるんだ。問題は会社を発展させるために出てくるんだ。だから我々は問題が出てくるのを嫌がってはならない。問題が出てこないと問題がなければ今のままでいいとなってしまって、人間も会社も成長しない。問題が出てきて初めてその問題を乗り越える努力をして、人間も成長し会社も発展する。問題はなければならないんだ。成長するために問題がなければならないんだ。問題が出てくることを嫌がってはならない。問題が出てこないことを願ってはならない。例え我々が問題が出てこないことを願っても、人間は不完全だから問題が出てこないことはない。常に問題がある。不完全な人間の社会においては常に問題がある。問題のない現実はない。問題があることが当然であって、問題があることが健全であって、問題があることが正常であって、問題がないということは実はあるのに見えてない。これほど危険なことはない。本当の人間の人生においては問題があることは当然であって、問題がないことは異常だ。問題あって当然なんだ。だから我々は問題を乗り越え続けていく能力を持たないと、人生を生きていけない。**

**だけども、多くの人が問題や悩みが早くなくなって欲しい、問題や悩みのない人生を生きたいと思うんですね。これは残念ながら怠け者の人生だ。問題がないことを願うのは苦労したくないだけの話なんだ。楽がしたいということ。問題が出てこないことというのは「易きに流れ安逸を貪る」、楽がしたい人生を求める人間の、弱い人間の生き方なんだ。結局、そういう人は結果的に皆不幸になる。問題から逃げても問題はなくならない。問題が出てこないことを願っても問題が出てくる。問題があっても問題がないと思ったら、それは足元をすくわれて、落とし穴に落ちる。我々は問題を恐れてはならない・出てこないことを願ってはならない・たじろいではならない。問題こそ自分を成長させるために出てきてくれている現象なんだ。まずは、問題から逃げないという姿勢を確立するために問題の意味を理解する必要があります。**

**その上で問題をどう乗り越えたらいいのかという問題解決能力が必要になってくるわけです。問題を感じるのは感性ですけど、問題に答えを出すのは理性です。ですから理性能力の使い方をちゃんとわからないと、我々は人生をたくましく生き抜いていくことができません。多くの人は理性の使い方を知らないか忘れていて、結果として問題を乗り越えないで人生に苦しむんですね。理性の正しい使い方とはどういうことなのか。理性能力というのは客観性と普遍性の能力と言われておりまして、理性を使って正しい答えを出そうと思ったならば、物事を外から客観的に眺めてみるという立場に理性を置いてあげないと、理性は正しい答えを出すことができません。例えば、深い森の中に迷い込んでしまった人間が迷った状態でどちらに進んで行ったらその森から早く出られるかと考えても、答えは出ません。迷いながら考えたら、答えは出ないんですね。あっちに行ってみようか、こっちに行ってみようかとしている間に疲れ果ててしまいます。では、迷い込んだ場合にはどうすれば良いのか。方法論としては、森の中に生えている一番高い木のてっぺんに登って、そこから森全体を外から眺めるならば、出口までの道筋が一発でわかる。理性能力というのは客観性と普遍性の能力と言える所以です。物事を外から客観的に眺めてみるという立場に理性を置いてあげないと、理性は正しい答えを出すことができません。そういう限界のある特徴が理性であります。これも理解していないと正しい理性の使い方ができません。一番高い木を探す最中も危険はつきまとうという話もあります。また、そもそも登れるのか。それは横に置いておいて…。とにかく、悩みながら考えては悩みのドツボにはまって、答えが出せない。「こんなことをしたら、こんな問題が出てくるしな。これをしたらあいつに迷惑がかかる。どうしようもないな」となってしまう。**

**悩みながら考えたら結局、自分が死ぬしかないという状況に追い込まれてしまうんですよ。そういう状態で友人に相談して「俺はもう死ぬしかないんや」と言ったらね、友人は「死ね」とは言いません。「その気になったら何でもできるやないか」と一緒に考えて「頑張ろうよ」と励ましてくれる。自分で悩みながら考えていたら死んでしまう。友人なら「待てよ」と言える。この距離が問題解決能力をつくってくれるんですよ。どういうことなのか。自分が悩みを持ったら、「もしこの悩みが俺の悩みではなく、他人の悩みであったらどうするだろうな」と。「もし相談されたら俺はその人に何をしてやろうか」と考えたら、必ず正しい答えが出せるということなんですよ。自分で考えている分には答えは出ない。他人ごとにして他人から相談されたら、どうアドバイスをするか？ という考え方をすれば必ず正しい答えが出る。これが理性の使い方なんですよ。理性は物事を客観的に眺めてみないと答えが出せないんだ。だけどほとんど皆悩みながら苦しみながら考えている。だから、その地獄から抜け出せないんですよね。それを一転翻して、理性の使い方がちゃんとわかったのなら、全く違った対応ができる。他人ごとにして他人から相談されたら、どうアドバイスをするか？ という考え方をすれば必ず正しい答えが出る。例えば週刊誌で芸能人のことを読んでいるときでも、奥様方は一発でその芸能人の悩みや問題を解決しています。他人ごとがゆえにそれが可能になるんですね。これが、悩みながら考えている人間と、悩みの外に出て客観的に眺めて答えを出す人間との違いです。これは大違い。これができないと悩んで、悩んでしまってどうしようもなくなってしまう。細木数子に駆け込む。細木数子も他人ごとだからアドバイスができる。それを自分ひとりで行うんだ。この正しい理性の使い方を身につけると、どんな問題でもひとりで乗り越えて生きていける。**

**実際問題、乗り越えるためには、いろいろな能力を持った人に協力を仰がなければならないこともあって、自分ひとりで解決とはならないこともあるかもしれませんが、とにかく自分が中心になって問題を乗り越えていくという状況をつくることができます。ひとりでは難しい場合、解決するために必要な能力を持っている人を探して出してきて、協力を仰ぎながら問題を乗り越えていくこともしなきゃなりません。自分が対面している問題の解決に必要な能力を持っている人を探し出してくるのも、自分の力なんですよ。だから決して他人の助けを借りて、他人任せでやっているのとは違います。協力してもらったとしても自分の力で生きていることになります。だから決して助けてもらったらいかんということではありません。これも自分の生き方で、自分の力です。大事なのはとにかく他人ごとにできるかどうかなんですよ。自分の悩みを他人ごとにして、外からその悩みを眺めてみる。そういう立場に自分を置く…それができたら、どんな問題も全部自分で解決できます。恋愛の悩みでも、どんな悩みでも、会社の経営の悩みでも全部これでやっていける。私も高校時代、そういう体験がありました。数学の問題で解けずに悩んでいた。同じ問題で友人も困っていた。それで私に相談に来たんですよ。自分が解けない問題ですから困ったなと思ってたんですけど、でもなんか相談されたら、助けてあげようと思って考え始めたんです。そうしたら突然閃いて、「こうしたらいける」と。気づきというか発想が出てきて、解けたんです。自分ひとりでは解けない、他人からどうしたら良い？と聞かれたら解けた。**

**これは、理性の正しい使い方、活かし方によるものだけではないんですね。ここにはもうひとつあるんです。他人に教えてあげようとすると、愛が出てくる。理屈を超えた愛の力なんですね。答えを閃かせてくれる愛の力。自分ひとりでは解けない、他人に教えてあげようとすると解ける…ここに理性を超えた力を実体験として感じました。その意味においても、他人に教えようとすることが、理性だけで対応する以上の発想を命から湧き出させてくれるということがわかりました。理性+愛、それが自分ひとりではなんともならんときに、他人ごとにする。ことで出てきてくれる。まずは他人ごとにする、これが問題解決能力をつくる、不完全な人間が問題を乗り越えていく生き方を人生において獲得する基本原理なんですね。**

**もうひとつ大事な原理は、問題には答えがある。答えのない問題はない、と知ることなんですよ。どんな問題でも悩みでも全部答えがあるんだ。だから答えが出るまで止めたらいかん。うまくいくまで止めたらいかん。途中で止めたらその程度の人間で終わってしまう。人生成功と幸せを手に入れようと思ったら、一旦やり始めたらうまくいくまで止めない。そうしないと、本当の人生の成功者になりません。なんでどんな問題でも答えがあると言えるのか。本当の問題というのは、今自分の持っている力で解けないもの、これが本当に問題なんですよ。今自分の持っている力で解ける問題はそんなものは問題じゃない。だけど、学校で先生が与えてくれる問題というのは答えがある。本当の人生の問題は、何ともならんという問題なんだ。今自分の力ではいかんともし難い。そういう問題はなんで出てくるか。自分を成長させるため。自分の持っている潜在能力を命から引っ張り出してくれるために今自分の持っている力でなんともならん問題がやってくる。**

**これは実は、その人を成長させてあげようとする母なる宇宙の思いを持って出てくる問題なんです。母なる宇宙は常に命を成長させてあげようとしている。なぜなら、宇宙は地球上に生まれてきた生命を進化させるために環境の激変という問題を与える。環境の激変とは全生物が絶滅するかもしれないほどの大問題。それも母なる宇宙が命を進化させるために与える愛ゆえの試練。環境の激変がなかったら、命は進化しない。よく言われるようにガラパゴス諸島に住んでいる多くの生物は、周りが海に囲まれているので環境が変化しない。何万年、何十万年前と同じ命の形で今を生きている。成長できない。だから、我々に降りかかる問題も母なる宇宙が与える困難なんだ。これも成長するための愛ゆえの試練なんだ。今自分の持っている力で解けない問題が出てくることで、命から潜在する能力が出てくるんですね。今自分の持っている力で解けている間は潜在能力は出てこない。これが潜在能力の顕現という成長です。**

**ところが問題を乗り越える答えが命から湧いてくる。その潜在能力は遺伝子なんです。生まれながら命に与えられているのが、遺伝子なんです。その遺伝子が答え。ということは、問題も答えも母なる宇宙から与えられるということになります。つまり、問題が出てくる以前から答えはあるんだ。しかも問題は命の中にある答えを引っ張り出すために出てくるもの。ということは、問題と答えは最初からつるんでいるということ。仲間みたいなもの、ということが宇宙と命と進化の繋がりからわかってくるんです。**

**答えは最初からあるんだから、諦めてはいけない。上手くいくまで止めたらいかん。これが成功する人間の生き方なんですよ。どんなに失敗しても上手くいくまで辞めない。今回ノーベル物理学賞を貰われた方も3000回も失敗したとおっしゃってましたね。なぜ3000回以上も失敗したのに止めなかったのか。「うまくいくと信じていたから」だと言っていましたね。ですから、どんな問題も答えのない問題はないんですよ。必ず乗り越えられる。人間の生き方として、答えが出るまで成功するまで止めない、この辛抱強い、意志の強い生き方が大事なんですね。そういう信念のもとで理性を正しく使うなら、意外に早く答えは出てきます。どんな困難にぶち当たっても、諦めなければ乗り越えられるという生き方を貫いてもらいたいと思います。これは人生を生きる秘訣ですよね。成功した人間は全部それでやってきたんだ。諦めなかったんだ。本当の問題解決能力というのは、どんな問題でも答えがある。答えが出るまで止めたらいかんと、そういう信念を持って理性を正しく使うということをすれば、必ず問題は解決できる。**

**最後は、「捨てる勇気」。いろいろとやってみたけど、もうどうしようもない。本当にお手上げ状態になってしまったらどうするか。そういう状況に追い詰められてしまった最後は、捨てる勇気しかないんだ。それは、人間が追い詰められて、苦しくなるのは、これだけは守らないかん、これだけは隠していないといかんと。誰にも渡せないというものがあると、人間は追い詰められて、どうしようもない状態に陥れられてしまう。そんなときにどうしても守らなければならないものを捨ててしまえば、一遍に楽になって助かる。昔、相撲の兄弟、若乃花と貴乃花の話で、お父さんが死んでしまったとき、相続争いで兄弟喧嘩が始まった。しかし、若乃花が相続放棄をした…そうしたら一遍に問題が解決してしまった。兄弟もそれで仲良くなることができた。それは、捨てる勇気が問題を乗り越えさせてくれたということです。捨てる勇気というのは、財産も地位も名誉も命も何もいらんという状態になって、それが故に助かるということなんです。とにかく、追い詰められるというのは、何か守らなければならないものを持っているから。それを手放すと一遍に楽になる。これもまた人生を生きる最終的な解決方法なんですよね。**

**それを表現する短歌があって、それは多分、の短歌だと思うのですが、「山川のに流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。深い山の奥からどんぐりの実が落ちてきて、せせらぎに流れ込むんです。あちこち岩にぶつかりながら流れ落ちていくんですが、あるとき大きな岩にぶつかったときに、殻が割れると中に入っていた実が落ちる。実が入っているときは流れているんですが、実が落ちることによって殻が浮かんでくるわけですよね。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」大事に持ってたものを離すことで助かっちゃう…という短歌なんですよね。「山川のに流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。とにかく、人間は裸一貫、何もなかった、全部捨ててしまったら良い、「いつでも俺はゼロから出発できるぞ」という気持ちがあれば、何も怖いものはない。そういう気持ちになれるということです。**

**戦国時代の言葉で、「死を必すれば則ち生き、生をえば則ち死す」というものがあります。死んでも良いと物事にぶつかっていったら、生きる道ができる。だけども、自分だけが助かりたいと思って、あれこれ作為を労すれば、かえってそのことが自分の命を落とす原因になる…そういう言葉なんです。捨て身の生き方ですね。俳句で有名な小林一茶の句で、「盗人に 取り残されし 窓の月」。小林一茶の家に泥棒が入って、全部盗られてすっからかんに。自分は今窓から眺めている月、風流は盗めないだろ、というヤセ我慢とも言えるんですが、全部盗られてもまだ自分には残っているということ。人間はついついなくしたものに未練を持ってしまって、残念がりますが、「まだ俺にはこれが残っている」と思うことで生きる力が湧く。これも追い詰められた状況の中で諦めないで生きていく力をつくってくれる大事な原理ですね。生まれたときは裸一貫で何もなかった。そのことを考えたらいろいろ無くなってしまって何ともならんけど、「まだ俺には命がある」「まだ俺にはこれがある」と、まだ自分の手の中に残っているものに目を向けて、そのありがたさに感謝することによって、我々は人生の絶望から這い上がることができる。人生を最も困難なときには考えなきゃいけないことがあるわけですね。**

**仏教なんかでは、執着を断つと言います。執着してこだわって未練を残して、そして自分の命を落としてしまうことがある。泥棒と戦ってナイフに刺されて死んでしまう…。生まれたときは裸一貫だったんだから、盗るなら盗っていけと思っていたら、刺されることもないだろう。泥棒に対して、「追い詰められて辛かったろうね」と同情するくらいの気持ちを持っていると、逆に泥棒が感動してしまって、謝って出ていったなんてことも。とにかく、物事に執着しないということも最後の最後には考えていないとならない場面もあるわけであります。**

**よく昔の時代劇を観ると、町人が道で侍の挿している刀の先にちょっと自分の体が触れてしまった。それで侍が怒って斬りつけようとした。その時に、町人は相手に向かって行かないで、その場にあぐらをかいて座り、「斬るなら斬れ」と啖呵を切った。侍は斬れなくなり捨てセリフを吐いて消えていった…という話もあります。命もいらんという姿を示すと、そのことによって助かることもあるということです。捨て身の潔さが人を感動させることもあるわけです。**

**いろいろ人生には切羽詰まった、どうしようもないことがあります。そのときにどうするかを平素から考えておけば、相当深みがある生き方を我々はすることができるんじゃないかという風に思われますね。とにかく、悪化した人間関係というのは人生において避けがたい問題であります。夫婦においても離婚という危機がある。親子においてもお互いに心が通じ合わないような状況や対立をすることがある。いろんな人間関係の悪化で、我々は人生においてさまざまな苦しみを体験します。そのときに悪化した人間関係を修復する力を知っていると知っていないでは大違いですね。ちょっと聞きかじったということが、そういうときにものすごい助けになるかもしれないということがあるわけです。**

**今日の話はどこか忘れないように自分が「いいな」と思ったことをちょっとメモっておいて、手帳にでも書いておいて、問題にぶつかったときの参考にして、人生を生き抜いていっていただけたらありがたいと思いますね。哲学というのはもっと幸せになりたいという幸福欲を実現するためにできた学問なんですよね。その意味においては私は哲学の話を皆様方にさせていただくときに、聞いていただく方、皆さんが一人残らず幸せな人生を生きてもらいたいという祈りと願いで、皆様方の生きる力に関わる話をしようという思いで毎回、毎回話をさせてもらっています。是非、私の気持ちも受け止めてもらって、本当に素晴らしい人生を生き抜いてもらいたいと願っております。どうもありがとうございました。**